令和元年度　佐賀県立唐津商業高等学校　学校評価結果

1　学校教育目標	2　本年度の重点目標
生徒一人ひとりの能力を伸ばし、ビジネスの知識と技術を習得させて地域や経済社会の発展に寄与しうる、心豊かで心身ともにたくましい人材を育成する。	①　授業と部活動に全力投球し、礼節を重んじた教育を育成する ②　教職員の業務効率化にむけた教育実践の充実を図る ③　ビジネス教育の実践と学習を通して地域貢献できる人材を育成する ④　キャリア教育の中で自己の進路について深く、幅広く学び、考えさせ志を高める教育を実践する ⑤　「心の教育」と人権教育・研修を充実させて、いじめと体罰のない学校をつくる ⑥　主権者教育に取り組み、主権者として必要な自覚と問題意識を持たせる

達成度　A：ほぼ達成できた
B：概ね達成できた
C：やや不十分である
D：不十分である

3　目標・評価

①　授業と部活動に全力投球し、礼節を重んじた教育を育成する

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力向上	①基礎学力（文字力、英単語、文法等、数学）の向上、定着 ②学びの基礎診断の活用を図る。 ③資格取得	・全教科について家庭学習の定着を目指す。 ・実用英語検定、全商英語検定において、昨年度以上の受検者、合格者を目指す。 ・進路に関わる数学力の向上を目指す。 ・客観的データに基づき、個人の理解力を把握し、学習方法の改善を目指す。 ・１年生→全商簿記２級、情報処理３級の取得を最低限の目標に据える。 ・２年生ＯＡコース→全商会計１級、原価計算１級（簿記１級）、ビジネス文書２級を取得させる。 ・情報処理コース→更に情報処理１級も追加。 ・会計科→日商簿記２級等の資格取得を目指す。 １学期に簿記の補習を実施し、手厚い指導を心掛ける。 ・３年生については課題研究などで目標を設定させ自発的に検定取得を目指す。	・長期休業明けの課題テストの実施。 ・漢字力テスト、英単語テストの定期的な実施。 ・授業や個人指導を通して検定取得を目指した指導を行う。 ・実力診断テスト（１年６月）→選科資料 ・実力判定テスト（３年６月）→進路選択 ・１年生については基礎基本を指導し積極的に学ぶ姿勢を定着させる。 ・２年生は１年次に取得した資格を基礎に上級の資格取得ができるよう授業等で論理的に理解できるよう指導する。また、取得できなかった資格を補習等で指導し、再チャレンジさせる。 ・３年生は自ら考え行動できるように課題研究などで自らの方向性を考えさせながら、高度資格取得を目指せる環境を整える。	B	・長期休業期間にできる量の課題量で実施した。しかし、休み明けの試験では欠点を取る生徒も見られた。 ・漢字、英単語ともに年間７～８回実施した。各回の満点者は、一覧表で名前を記載しクラスごとの平均点を掲載して奮起を促した。 ・業者模試を実施して得点分布の分析を行い、次に生かせる方策を考え提案した。学びの基礎診断も実施し、各教科より弱点単元などの分析を行った。 ・各学年ともコースや科の目標に沿った指導を展開した。	・家庭学習が定着していない生徒を一律に指導しても限界がある。学年指導の教科担当同士で、レベルに合わせた習熟度指導をする必要がある。また、特性を持った生徒に対する配慮も今後学校全体で指導体制の見直しが必要。 ・小テストを繰り返すことは、短時間記憶の成功体験に繋がる。目標設定には、効果がある。今後も続けていきたい。 ・業者模試のデータ分析を最大限生かせる進学先の進路選択に活用していく。 ・商業高校で取得した資格を進学先での活用法を積極的に生徒や保護者に伝えていく。
	○部活動指導	①部活動の活性化を推進する。 ②部活動を通して、心身ともにたくましい健全な生徒を育成する。	・進路実現に向けた部活動の加入率向上を目指す。 ・競技力の向上だけではなく、挨拶の徹底、ルールやマナーを遵守する心の育成、ひいては、施設・設備、部室、用具等を大切にする心を育てる。 ・部活動を通して、人間形成を図るとともに、自己目標達成に向けた指導を工夫する。 ・活動の中で、社会性や集団行動の大切さを育てる。	・加入状況の確認・把握し、未加入者には担任と連携しながら加入への働きかけを随時行う。 ・部室や施設設備の定期的な点検を行う。 ・各部部長との定期的な連絡会を行い、左記の要領を説明し理解させる。	A	・今年度より、１年次のみ全員部活動制を実施。２年次からは、任意加入とした。未加入者は、若干いたものの何らかの部活動に所属し、活動した。 ・部活動の顧問は、生徒育成に前向きであり運動部の実績は後半上向いた。また、水泳部では、インターハイ入賞も果たした。	・部活動の実施に当たっては、活動時間や大会参加の時期を考えなければならない時代になってきた。 ・一斉指導の方法や制約された中での工夫した指導法などあらゆる方策やアイデアを出すように今後改善の必要がある。 ・保護者との意思疎通を図り、指導者と保護者・生徒三者が目標とする活動内容の検討。
	●健康・体つくり	①朝食摂取率の向上およびの自己管理能力の向上 ②健康に関する自己管理能力の育成 ③学習環境の整備を図る	・朝食を毎日摂取する生徒の割合90％以上をめざし、生徒がバランスのとれた食生活をおくれるよう啓発する。 ・感染症予防の指導充実により罹患率の減少、感染拡大防止を図る。 ・視力・歯科に関して治療勧告者の受診率50％以上を目指す。 ・清掃・ゴミ持ち帰り指導の充実。	・保健だよりや食育だよりによる情報発信。 ・「食に関するアンケート」の結果に基づく実態把握および個人指導。 ・気になる生徒の個別面談を行い状況把握に努める。 ・個別指導の充実をはかる。 ・日々の全校一斉清掃、毎月の掃除点検により美化意識の向上を図る。	A	・年2回のアンケート調査から5月90.3％1月88.6％と目標を下回った。回答に「時間がない」が多かった。生活習慣の乱れも原因。 ・歯科40.3％、視力73.9％と昨年度と比べ大きく上昇した。家庭の協力が大きかった。 ・保健日誌による生徒の健康チェックや気になる生徒の個別相談にも対応した。	・地球環境の変化に伴い、夏場の猛暑が増え体力がない生徒の健康管理に配慮が必要だと感じる。特に熱中症予防や警戒情報などは、今後保護者などへメール配信等をして周知していきたい。 ・家庭環境や生活環境の変化から朝食欠食率が増加傾向にある。早寝早起きの習慣化と喫食の大切さを更に伝えていきたい。
	○進路指導	①就職の内定率向上 ②推薦入試合格率の向上	・朝自習の時間を利用し基礎学力の定着を図る。 ・就職内定率１００％を目指す。特に県内就職者数を増やす。 ・推薦入試合格率１００％をめざす。 ・小論文の指導力向上を図る。	・朝自習の教材を学習用ＰＣも活用し工夫する。 ・夏季休業中の面接・小論指導の充実を図る。 ・小論文講座への教員の参加を図る。 ・必要に応じて面談を行い、生徒の進路希望を把握する。 ・適性検査や学力検査を活用し、生徒の能力・希望に応じて適切な指導を行う。	A	・学習用ＰＣを活用しても効果がでなかったため、今年度は未実施。 ・就職支援員からの県内事業所の情報提供が的確であり、希望者に対して正確な情報発信ができ、県内就職率が６４％に向上した。 ・進学指導も業者模試のデータを参考に、高度資格のポイントを加味して合格することができた。	・今年度配置された就職支援員は、大変大きな成果を上げることができた。来年度も配置が決まり、県内企業の求人掘り起こしに期待ができる。 ・国立大学の募集人数や求める学生像などを再確認して受験者を決めていく必要がある。
	○生徒指導	①基本的生活習慣の確立及び規範意識の向上	・当たり前のことを当たり前にできることがいかに大切かを説く。 ・基本的生活習慣を確立させる。 ・交通ルール、マナーを理解させ、交通安全の徹底を図る。 ・服装を正し、躾指導の徹底を図る。 ・情報通信ネットワーク社会の危険性を理解させ、正しい情報モラルを身につけさせる。	・「生徒指導部だより」を活用し、指導の充実及び規範意識向上を図る。 ・登校指導等において、交通ルールと８時３０分登校の指導を行う。 ・学年と生徒指導部が連携を図り、身だしなみの指導を行うとともに、ＨＲ、授業、部活動など、教育活動全般にわたり注意深く観察し、指導を行う。 ・講演会や行事等を企画し、唐商生としての自覚・意識を高める。	A	・基本的生活習慣の確立とルールやマナーを守ることの大切さを指導できた。 ・ＳＮＳの活用方法や功罪について繰り返し指導した。ネット上のトラブルが人を傷つけ、それが消えないかを指導した。 ・社会に広がっている薬物講演会など意識の高揚に繋がった。	・社会変化に即した生徒指導のあり方を見極め、指導していく必要がある。 ・当たり前のことを自分で判断していく力を育成していく。 ・ＳＮＳトラブルについては、繰り返し指導していく必要がある。

②　教職員の業務効率化にむけた教育実践の充実を図る

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	○教育の質の向上に向けたＩＣＴ利活用教育の実施	①ＩＣＴ利活用ルールを守りつつ、学習用パソコンの活用を通した教育活動の充実を図る。 ②ＩＣＴ利活用教材の研究	・ＩＣＴ機器の利活用ルールの周知徹底を目指す。 ・15人以上の職員が学習用パソコン用教材を自作することを目指す。 ・校内外の活動において学習用パソコンを用いた発表を年間８回以上実施することを目指す。	・生徒・職員に対してＩＣＴ機器の利活用ルールの周知に努め、ルールの中での活用を呼び掛ける。 ・生徒が学習用パソコンを用いて発表資料の作成ができるように支援する。 ・情報セキュリティモラルについて呼びかける。	B	・授業の中で学習用ＰＣを活用する機会が機会が増え、生徒たちのＩＴ機器の活用能力は向上した。 ・発表の活動を通じ、自分の考えを的確に伝えられるようになっている。今後はこれらの活動をいかに学力の向上に繋げることができるかが課題である。	・自作教材の共有 ・研修会の実施 ・発表の機会をさらに増やす ・調べ学習の強化 ・学習用ＰＣや電子黒板等使いやすい環境を整える。
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	①業務改善に取り組み、自発的時間外勤務を削減する。	自発的時間外勤務を２０％削減する。	・部活動計画により、活動時間や内容について検討を行い削減策を検討する。	B	・期末テストや学年末テスト前の部活動自粛期間を設けて自発的時間外勤務の削減を行った。これまで平均で１０％の削減につながった。	・年間を通して計画的な部活動計画ができるような行事予定の編成と夏季休暇５日間の取得や学校閉庁日を生かした働き方改革の推進に努める。

③　ビジネス教育の実践と学習を通して地域貢献できる人材を育成する

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	○地域との連携	①地元企業のホームページを管理運営し企業側からの要望や指摘を受けながら随時更新を行い、１年を通して総合的に評価する。	・生徒が管理、運営するからつ学美舎は現在十数社と契約しているが、これを更に増やす。 ・新商品を６月末までに完成させ販売する。 ・昨年度より「金融教育研究校」の委嘱を金融広報委員会より受けたので、過去から現在の金融について知識を深め発表をする。	・大手デパート、百貨店など多くの客が集まる場所での販売、ＰＲ活動を増やす。 ・今年度は新商品で地域活性化へ貢献する。 ・「金融教育」では外部講師の招へいによる講義で多くの知識を吸収し、調べ学習で、知識理解を深めさせる。 ・２年間の研究成果を発表する。	B	・学美舎の活動は多くの地元商店から支援を受けて成り立っている。イベント出店での売上好評であるが、マンネリ化は否めない。 ・新商品開発「麗orange（うるオレンジ）」を開発して販売するに至った。 ・金融教育の研究成果発表では、地元商店におけるキャッシュレス化など時代に合った発表であった。	・人口減少が進むのは確実であるため、地方社会の中で足りないものを探し、問題意識を持って高校生ならではのアイデアを、見出していけるようにする。 ・課題研究の中で来年度以降もキャッシュレス導入の推移を調査し、データの蓄積をするとともに自治体や商店にも分析結果を公表していきたい。
	○地域貢献	①地域に有用とされる唐商生の育成。 ②地域と連携を深めた教育活動の推進。	・明るい笑顔と挨拶による街づくりへの貢献する。 ・地元企業のイベントへの参加や販売実習を毎月行う。 ・虹ノ松原清掃活動の実施する。	・校外での挨拶やマナーを向上させ徹底させる。 ・学び舎出店企業のイベントの手伝いや販売実習を行う。 ・生徒会やボランティア同好会を中心に、積極的に奉仕活動に参加する。 ・ＮＰＯ法人ＫＡＮＮＥとの連携により、虹の松原清掃活動を実施しその意義を深める。	B	・校内外で本校生徒の礼儀やマナーについて、来訪者や地域から称賛されている。 ・野球部は、唐津くんち前に地域の清掃活動を行ったり、ボランティア同好会は唐津市海岸の清掃活動を行ったり地域貢献に積極的であった。 ・今年度も３月に虹の松原清掃活動を実施計画している。	・地域になくてはならない高校生として挨拶とマナーのモデル校として構築していく。 ・部活動単位の地域貢献活動を広げ、市民から更に愛される学校づくりをしていく。

④　キャリア教育の中で自己の進路について深く、幅広く学び、考えさせ志を高める教育を実践する

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●志を高める教育	①キャリア教育 ②ミスマッチや早期離職防止を行う。 ③国際交流 （麗水情報科学高校との学校間交流）	・１年次・・・・・バス研修（大学及び企業） 企業インタビューの実施 ・２年次・・・・・インターンシップ 企業研究会の実施 ・３年次・・・・・講義（社会人講師招聘） 進路セミナーの実施 ・ＬＨＲや学年集会を通じて、勤労意欲の醸成につとめる。 ・離職した生徒の情報を収集し、就労支援を行う。 ・ハングル選択者が韓国語を積極的に使って、交流を進める。 ・受け入れに関しては、特定の生徒にではなく、学校全体・全校生徒で交流を行う。	・１年次に自己の将来の進路設計を立てるために、企業インタビューや４年制大学の訪問、大手企業の見学を通して将来の進路選択のきっかけをつくる。 ・２年次は１学期の後半４日前後の企業研究を通して、インターンシップを実施する。 ・３年次進路セミナーを実施し、就職試験直前の面接指導等を外部講師を招聘し実施する。 ・卒業直前に外部講師により講演会を実施し、社会人としての準備をさせることにより、早期の離職を防ぐ。 ・進路ガイダンスで企業理解等を深める。 ・職員・OBを通じて、卒業生の動向把握につとめる。 ・生徒・保護者と十分に面談を行いミスマッチをなくす。 ① 訪問・受け入れに関して、国際交流委員会を複数回開催する。 ② 交流に関して周到な準備を行い、授業内容を生かした交流会を実施する。 ③ 受け入れの準備段階で、全体的な交流に関する共通理解を図り、各教科間での役割分担を明確にする。また、ハングル選択者が交流相手の支援や案内が出来るように指導する。	B	・１年～３年まで計画を立て目標や方策に掲げた内容を実施できた。一つ一つの行事に意味を持たせ、教員と生徒が理解して実施することができた。段階を踏んだキャリア教育の構築に繋げることができた。特に本年は、２年次インターンシップを２学期に実施した。 ・外部講師によるスポット的ブラッシュアップを実施して、就職試験対策や進学試験対策・資格試験対策に臨むことができた。 ・国際交流では、麗水情報科学高校へハングル選択者の訪問を通じて交流を深めることができた。しかし、相互交流する予定であった韓国からの訪問は外交問題により叶わず残念な結果に至った。 ・１月には、２週間であったが韓国からの留学生を受け入れることができた。	・必要な研修や講演は残し、時代に合ったキャリア教育ができるように計画を見直していく。本年は、２年次インターンシップを２学期に実施したが、時期と効果について検証し、来年度に繋げていきたい。 ・進路実現に向けて、外部講師も必要であるが、学年が上がるごとに必要となる担任力の向上と、本校の生徒たちにとって最適のアドバイスができる知識を身につけるようにする。 ・国際交流活動に加えて留学生受入事業も積極的に行っていく。３月から１０か月間ドイツから留学生を受け入れる予定である。

⑤　「心の教育」と人権教育・研修を充実させて、いじめと体罰のない学校をつくる

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	①教育相談体制の充実	・スクールカウンセラーの年間来校予定表を保護者にも配布掲示し相談しやすい環境を作る。 ・教育相談の機会を設定し、職員と生徒の信頼関係と生徒理解を深める。 ・職員研修を実施し、情報提供等を行うとともに、学級経営の支援をしていく。	・教育相談週間を設け、心理検査を実施する。 ・スクールカウンセラー事業を有効に活用する。 ・特別支援教育・教育相談の職員研修会を１学期内に実施する。	B	・4月に教育相談週間設定し、新しい環境での生徒の悩みや生活状況を把握した。 ・心理検査を実施し、7月の三者面談で活用してもらった。 ・教育相談室を開放し、面談やクールダウン用に活用してもらった。 ・6月にＳＣによる職員研修を実施して、職員間の共通理解を図った。	・心の悩みを抱える生徒に対応するためにも家庭環境の変化を早めにキャッチできるような体制づくりが必要。 ・ＳＣや養護教諭がキャッチした情報を共有し、必要な支援方法を構築していく。 ・今後も職員研修を通して、心の教育や生きる力を育む教育を強化していく。
	●いじめの問題への対応	①教職員や友人と信頼できる関係の中、安心・安全に学校生活を送ることができる。	日頃より生徒からの小さなサインを見逃さないよう、生徒理解に努める。いじめの防止に重点を置き、早期発見・早期対応に努める。	・年２回のいじめアンケート調査を実施し、早期発見に努める。 ・月に１回程度、生徒の情報共有の時間を設け、職員の共通理解を図る。 ・いじめが疑われたら、学年団を軸に正副担任・教科担当者、部活顧問の関係者が話し合い、いじめ対策委員会を開いて共通理解の下、迅速に対応する。	B	・いじめアンケートを通して早期発見につながった。日頃の学校生活から生徒の言動・行動を注視していく。 ・週１回の担任会で生徒情報を共有し、情報交換に努める。	・いじめはいつでも起こりえる。力の強いものから弱い者への発言から始まったり、男女間で始まったり発端は様々である。ケースバイケースの対応になるが、サインを見逃さない情報共有を毎年行うことが大切になる。
	○人権・同和教育	①人権を尊重し、差別を許さない態度を育成する活動を行う。	人権や差別について考えさせる学習や研修を行う。	・職員研修を充実させ、職員の人権・同和教育についての理解を深める。 ・人権学習や進路保障を通じて、差別を許さない態度や姿勢を養う指導を行う。	B	・１学期人権・同和教育の公開ホームルームを実施し、研修会も行い統一応募用紙の理解を深めた。 ・高同研事務局から発行される広報誌を配布して職員の人権意識の高揚に努めた。	・ダイバーシティ（多様性）やインクルーシブ教育の大切さを職員研修を通して理解を深める取組みが必要である。 ・男女混合名簿の導入や性的マイノリティへの配慮など、これからの社会が受け入れなければならないことを職員研修で取り組む。

⑥　主権者教育に取り組み、主権者として必要な自覚と問題意識を持たせる

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	○職員の共通理解	①選挙の実際を理解させ、話し合いを通して自己の意見を構築することによって、主権者としての自覚と問題意識を持たせる。	・選挙に関する基本的知識を身につけさせる。 ・社会的課題を見いだし、仲間と共に考えをまとめる姿勢を育てる。 ・「主権者」として、国政に参加する意識を持たせる。	・年間計画に沿って、学年や教科との連携を図り、主権や選挙について時間を設けて扱い、理解を促す。 ・地歴・公民科では、時事問題を取り上げ、現在の社会問題について考えたり、話し合いをする場を設け、「主権者」としての自覚を持たせる。	B	・ホームルームや授業を活用した主権者教育を行った。 ・唐津市と協力し、投票率向上に向けた取り組みとして、校内に臨時投票所を設けるように進めている。	・少子高齢化に伴う１票の重要性を教えるために、若年層の主権者教育が重要になる。 ・１年間に行われる予定の選挙カレンダーを作成して、意識高揚に努める。

●は共通評価項目のうち必須項目、◎は共通評価項目のうち特定課題、○は独自評価項目

4　本年度のまとめ・次年度の取組

本年度は、◇学校教育目標に示したビジネスの知識と技術を習得させて地域や経済社会に発展に寄与しうる、人材の育成に尽力できた。最もその効果が表れたのが県内就職率の向上である。昨年度、就職した生徒全体の中で県内就職率53.5％だったが、今年度は64.2％になった。その原因は、少子化の影響から親子とも県内志向が強くなった。また、就職支援員制度により求人の開拓が功を奏した。◇健康・体づくりでは、朝食の喫食率調査を２回実施した。5月90.3％、1月88.6％と減少した。この結果から朝が慌ただしく時間がないという回答が増えたことと、生活の乱れも原因ではないかと思われる。◇志を高める教育では、教科・学年を横断したキャリア教育に努めた。本校は、就職と進学の割合が平均50％ずつであるため実社会への準備としての教育に力をおき、その成果は概ね果たすことができた。◇いじめ問題や心の教育への対応については、年間２回アンケート調査を実施し、早期発見と予防に努めた。日頃の学校生活から生徒の言動・行動を注視するよう職員会議でも共通理解した。◇業務改善・働き方改革では、時間外勤務の意識を高めるために職員会議で周知したり、職員室に規定を貼りだして可視化した。また、定期考査前の部活動中止の厳格化にも着手した。昨年度に比べ約10％の削減に繋がった。今後も、会議の精選や資料の簡素化など日常業務のスリム化を積極的に推し進める必要がある。このように、欠かすことのできない取り組みは継続していく取り組む一方、改善や精選が必要なものについては、十分な見通しを行ったうえで、取り組んでいきたい。